



武田泰淳全集

第一卷

筑摩書房

武田泰淳全集 第一卷

昭和四十六年十月二十日 第一刷発行

著 者 武 田 泰 淳

発行者 竹之内 静雄

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八
鉄 筑 摩 書 房

電話 東京(三)七六五一(代表)
振替 東京 四一 一二三
郵便番号 一〇二一九一

印刷 株式会社 三松堂
製本 和田製本工業株式会社

(分類) 0393 (製品) 72401 (出版社) 4604

武田泰淳全集 第一卷

第一卷 目次

廬州風景……………	3
E 女士の柳……………	30
会へ行く路……………	40
学生生活……………	49
玉璜伝……………	59
閃 鑠……………	72
才子佳人……………	81
才 女……………	106
秋の銅像……………	118
人間以外の女……………	126
謝冰瑩事件……………	134
女賊の哲学……………	140

月光都市	150
夢の裏切	168
聖女俠女	187
詩をめぐる風景	201
女帝遺書	216
し恐怖症	233
細菌のいる風景	238
烈女	260
淑女綺談	269
橋を築く	286
女の国籍	295
流沙	315
美しき湖のほとり	339
水の楽しみ	350

うつし絵……………359

興安嶺の支配者……………374

解説……………磯田光一395

解題……………407

小

説

1



東大支那文学科入学 昭和六年（十九歳）

廬州風景

水野雪江さんがなくなってもう五年になる。結婚して日もないのに旦那さんが戦死され、水野さん自身は看護婦として支那大陸へ渡った。そして一年半ばかりの病院勤務ののち、コレラ菌におかされて、あちらの土となられた。

私は雪江さんの妹さんから、この手記をおあずかりした。

手記は死の直前、死の迫るのを知らぬ雪江さんが、当時働いていた廬州の病院で書きつづったものである。あちらの風物に接して感じたことを何心なくしたただけであるが、終戦までは発表するのを気づかわれる箇所もあり、今日に至った。かなしみを忘れるために異国の自然にひたり切っていた雪江さんの気持は、今読みかえしてみても、よくしのばれ、廬州の秋景色の中にたたずむ白衣の姿が眼に浮ぶようである。ことに大陸の風物を愛する私にとって、自分の眼ではもう一生眺められそうもない古城廬州の全景が、日本の一婦人の筆で書き残されていることがひそかな楽しさでもある。それは手記をしたための時の雪江さんの心に

くらべれば自分勝手な、あさはかな、淡い楽しさにすぎないのであるが。

× × × ×

私は秋のやって来る気配を少しも見逃すまいと気をつけていた。いつか人知れずやって来る秋のほんのちよっとした前ぶれでも見つけたら、もうそれで楽しみが湧いてくるのに。楽しみはひとりでに胸のうちにひろがり、いろいろのことがまた生き生きとして来るのに。季節のうつりかわりがどんなに不思議な力を持つものか、私にもかなり良くわかって来たつもりだ。眼にうつる自然の変化のあの得もいわれぬ玄妙なはたらきは、何ものよりも私には親しいものだ。何ものよりもと言って、仕事以外に何もない私だけれども。上陸してから僅か一年あまりなのに、その一年の季節のうつりかわりが、一生忘れられないほど根強く身にしみついてしまった。木の葉一枚の色の変化で心がときめ

くことがあるのは何故だろうか。秋から冬へ、冬から春へ、春から夏へ、私は物珍しい生活をつづけている。どの小さな部分をとり出してみても、生活の想い出がこんなにせつなく心にしみるのは、みんな自然の季節のためなのだ。そのほかに何があるだろう。今、この廬州で私ははじめて知る夏から秋への移りかわりを心楽しく待ちうけている。

廬州の街はどこもかしこも白い夏の埃を浴びていた。埃は石畳の上にも壁の上にも溜っていた。そして屋根からも舞い上り、またさまざまの風に乗って街の上に降りかかっていた。なかば傾いた家の柱や、ぶらさがった看板も土埃のために白くなり、何となく形がぼやけて見えた。家の奥まで埃は入りこみ、夏でもひやりとする陰気な竈かまどのあたりまで来て積もっていた。空の色も埃のために鈍くなっていた。そんな空の色を、しかし私はあまり仰ぐ暇がなかった。コレラを予防すること、私の勤務している病院の当面の任務が私を狂気じみたいそがしさに追い込んでしまったからだ。

「いいかね。コレラはどんどんふえるよ。君たちだって不注意すればすぐかかる。かかれば自分が悪いんだからね」私が配属することになった外科の森医官は、私が申告もおわらぬうちにきびしく言いわたした。

街には至るところ、コレラに負けぬようにとの貼紙がし

てあった。その貼紙も埃をふくんだ夏の風にあおられ、裏がえしにされ、下半部をちぎられ、文字も見えぬほどバタバタ動いていた。乾燥しきった無愛想な街並は、はげしい日光の下では、馬鹿げたような、にくたらしいところがあった。暑さよりも、その埃にうずもれた街のだらしない乱雑な有様が私の心を打った。おびやかすような伝染病の貼紙が死の啓示に似て奇怪に陰惨であった。乾きはてた空気のくせに時々、人の去ったあとの家の奥から古い香料や酒の匂いが流れ出して来て、埃で白くなった鼻の中へツーンと入って来た。その匂いを嗅ぐと、ああ街には人がほとんどいないんだな、と今あたりしく感ぜられた。それでもそんな人気のないうす気味わるい街に対しても私は自分の興味を棄てなかった。住民の退却したために荒れ果てた町には私ははなれていたし、この街もゆっくりと自分で歩いてみたいなと考えていた。私に歩きつくせる手頃の町だし、人のいない街の狭い石畳路を曲りくねってどこまでも歩いて行き、どこへ行きつくか試してみたらいいだろうな、などと空想はした。しかしそんな私ののんきな空想は容易には実現されそうもなかった。私の耳もとは厳格な森医官の声が日夜鳴りひびいていたのだから。

秋が来るまでは何もかも走馬灯のようにめまぐるしかった。

「死亡率は三割だ」深夜まで医官は統計表を前にして疲れた顔を緊張させていた。「これだけの人数じゃとても無理なんだ。それにみんな熟練者じゃないんだから」

医官はまだ三十前で、仕事に夢中になると私や楊さん（ヤン）をいらいらとせきたてた。この予備病院は広い中学校の校舎に開設されていた。毎日増加する患者はその校舎にあふれていた。外科の第一病棟は私と楊さんがうけもたされた。

楊さんは廬州の町の娘さんで元氣よく働くが日本語がわからなかった。担架や粥の桶をかついだり、薬や蠟燭を分配したり、消毒水や石灰粉末を撒いたり、仕事はあとからあとからとつづき、食事のひまもなかった。患者たちを喜ばせ、助けられるというのぞみで、ただそれだけで元氣をつけた。しまいに二人とも地べたに坐りこみ、顔みあわせて笑いながら、身うごきできずにジッとしていることもあった。

「裏門の消毒水がカラッポになつてるじゃないか」そんなに疲れはてている私たちに向つても、医官は遠慮なく命令した。私たちは肩や腰をさすりながら重い水桶をかつぐために起ち上る。

朝起きるとすぐ二人は石灰をブリキ罐からガラガラ木の箱へあけて、それに水をぶちあける。石灰は噴火でもするようにシューシュー白い煙をたちのぼらせ、みるみる砂糖

のような純白の粉末になる。石灰はすばらしい熱を発散するため、注意しないと危険であった。

ある朝、楊さんは、木の箱にかけた蓆（せど）をまくる時、アッと叫んで二、三步あとへさがった。熱に焼かれた片手をおさえて、白い顔を青くして立ちすくんでいた。

「駄目じゃないか。焼けどするにきまつてるのに」通りかかった医官は大声で叫ぶと、いきなり楊さんの手を握ってしらべようとした。楊さんは首を振って身をひき、反抗するような目つきで、キッと医官を睨んだ。それがいかにも若々しく野性的で、私は思わずハッとした。医官が去ったあと楊さんは唇をかねて同じ姿勢で立ったままだった。

私はそんな氣の強い楊さんをたのしいひとと思つた。

門前の甕には溶製石灰酸を入れる。石灰酸の液は茶褐色のビンの中から、水を一杯にはった大甕の中へ、ドボリドボリと落ち、白く溶け、やがて無色に澄んで行く。そんな時でも、若い楊さんは、ぼんやりしてて液がじかにかかり、皮膚を赤くはれあがらせたりする。痛そうに顔をしかめても、私に心配をさせないよう、いつも快活そうにどんな仕事をかたづけてくれる。

私たちは誰もかれも消毒水の匂いをブンブンさせながら歩きまわっている。日に何度も伝染病患者を担ぐし、たまには患者の嘔吐した汚物が手や肩先にかかるので、門の出

入にはポンプの消毒液の霧を浴びるからである。元氣な楊さんは、そんな霧を浴びるのは、めんどろなものであらう、いいかげんにすませようとする。でも私はアーンと口をあけさせ咽喉の奥まで吹きこんであげる。困ったように赤い唇を丸めたり、開いたりする楊さんはとても可愛い。私たちは大きな白い手術衣を着て、ゴム長靴で音もなく歩きまわる。夜など幽霊の動くのに似ている。その幽霊用の手術衣を着た楊さんは、貧乏な天使のように美しい。たとえいやがっても私は私たちの守り神である消毒液で彼女をグシヨグシヨにぬらしてやらなくちゃならない。もし楊さんが菌におかされたら、ああ考えるだけでもおそろしいことだ。楊さんときたら、冷える夜でもその霧のかわかぬ間に、もう毛布を半分かけたまま眠りはじめる。

風が吹けば吹いたで、雨が降れば降ったで私たちは白い石灰を撒いて歩く。石灰の粉末は細いので、眉毛にも頭髮にも附着し、油断するとむせかえる。中学校の校舎ばかりでなく、附近の民家まで拡張して病舎にしてある。昨日まで誰もいなかった空屋に今日は瘦せおとろえた病人が寝ていることがよくあった。次から次へと病室を増すため、その番号が入り乱れ、近いはずの番号の部屋がとても遠くにあり、こんな所にと驚くほど曲りくねった路の奥に、テントをかぶっただけの兵士が二、三人淋しげにかたまって転

がっていたりした。壁から壁へ穴をあけ、家から家へ壁つぎに続く病室をくぐり抜けるようにして、二人はマスクをかけた幽霊姿で、路地も敷石も溝も便所も井戸も、空地も真白にするまで休まなかった。

コレラ顔貌！ 私は永久にそれを忘れられぬだろう。死人よりも醜い。ともかく生きていて、ほとんど生きていないくせに、それでも死のうとしない仮面のような顔。四角い顔も丸い顔も、勇氣のみちた顔も意志の強い顔も、みんな同一の顔貌に変化して行く。瘦せおとろえ、水分を失い、土色となり、生の最低極限へ急激に落下すると万人はただ一つの容貌になってしまうこと、これは何という哀しい現象だろうか。

夜中でも、患者発生ときくと私たちはとび起きる。第何号室といわれ、懐中電灯で照しながらどりついでは、患者がどれかちょっとわからない時もある。病人は時々爬い出して、土間や石段のほとりに長く寝そべっていたりする。たてつづけに吐きながら、腰がぬけて立てない。汗と泥で汚れたズボンをぬぎかけたまま力尽きている人もある。かすれた声で水をもとめ、濁った眼で訴えるように私たちを見上げる。弾薬囊や帯剣を枕もとのせ、担架に載せ、かつきあげる。そして運んで行く。あとは知らない。生気のない兵士たちは運び去られる仲間を力なく見送っている。

そんな時、暗いじめじめした風景の中で、私の肩にした金屬製の噴霧器だけが、いやに莊嚴にピカピカと銀色に光るのだ。まるで弱くもろい兵士たちの肉身をあざ笑うように。

前線の患者がトラックで大量に輸送されはじめた。意地わるく夜に入ってから到着する。長くつづく塹壕の一部を壊した入口から、トラックは苦しげに揺れながら何台も何台も入って来る。その数の多さに、そばに立った楊さんは、オウオウと呼ぶ。患者到着の広場は非常にひろく、夜の霧が一面にたちこめている。白く乾いた土地の上を流れながら、霧は青白い自動車のライトに照り映え、ぼんやりした重い感じをあたえる。その霧の中でもこちらでも焚火がはじまる。焚火は照明にもなり、夜露にぬれた患者を暖める役もする。妙にさまざまな色彩をもつ薄明りの中に叫びあうトラック隊の人々の姿が見え、赤く燃える焚火の周囲には軍医や輸送部の隊長が集り、いそがしげに事務をはじめる。そんな時、森医官の長身と色白の顔がきわだって、キビキビと活気づいて見える。

トラックからおろされた患者は所せまいまで、地面に寝かされたまま、森医官は外科患者を一人々々ヒョイとのぞきこんでは病名を決定し、カードを着ける。それを衛生兵や私たちは、指定された病棟へ運んで行く。どんな患者か顔を見分けるひまもない、ただ早く早くと足もとに気をと

られながら運んで行く。四、五人運んでからだった。私は楊さんが何物かに気をとられ、ソワソワしているのに気づいた。新しい担架に手をかけるのに、いつもの働きがない。闇の中で足がのろくなる。

「どうしたの？」トラックの横へ立つと、私は彼女の顔をながめた。何でも無いという風に手を振るのが、かえっておかしかった。次の患者を運ぶ途中、楊さんは片手を挙げ、通路の入口に置かれた担架を指さした。

「え？」私は歩きながらチラリと眺めたが、どんな患者かわからなかった。

ひき返す時、私は立ちどまってその担架を見た。暗がりではハッキリしないが藍色の綿衣を着た兵士、それは支那兵であった。

楊さんはその担架の竹の柄に手をかけて、私の方に顔をむけた。頼むような眠つきだった。私は思わずその担架をかつぎあげようとした。

すると通りがかりの衛生兵が「そいつは死んでるよ。ほかの奴を運べ」と怒鳴った。私はそう言われて手をゆるめたが、楊さんはもうグイと肩にかついでいた。

屍室にはランプがともっていた。ほかに一つだけ、やはり今日のらしい屍が置かれていた。そのわきに担架をおろすと、私は痛ましい気持、それから軽い不安を感じた。小

さいランプなのに、ばかに明るくて、支那兵の腹のあたり
の血のしみが、綿衣にひろがっているのが、毒々しく見え
た。

楊さんは身をかがめると、手早く屍の上衣のポケットを
しらべた。ボタンをはずし裏側もさぐった。小さい手帳、
身分証、紙片など取り出すと皆自分のポケットにしまった。
屍は苦しみのために開かれた口をまげて、なされるままと
いった形で仰臥していた。そのすばやい手さばきの間、楊
さんは悲しげな風も、おどろきの風も示さなかった。ただ
ひどく真剣であった。それを見下している私は、やはり屍
のように、なされるままといった形で立っていた。そして
楊さんが立上ってうながすと、無言で屍室を出た。

その夜、仕事が終わってから、私はなかなか寝つけなかつ
た。楊さんと、支那兵の屍と。私はさまざまな想いにから
れた。楊さんは中華民国人だったんだな、という感慨が湧
き上ったまま消えないで、それがあたりまえとも、また容
易ならぬことも思われた。訊問するつもりで、トラック
隊が拾って来た敵兵。それが途中で息をひきとり、私たち
の眼にとまっただけのこと。血にまみれた何百もの男たち
が死んで行く毎日の裡では、ホンのちょっとしただきごと
に過ぎないのに、何故たった一つの屍がそれほど気にかか
るのだろうか。もしかしたらこの夜以来、私が楊さんを冷

い目で見るとはしらないだろうか。そうなったら二
人の仲は結局どうなるのだろうか。そんなことまできづか
われた。屍室に入った瞬間感じた痛ましさと不安が、一晩中、
私を包んでいた。

このようなあわただしい日々の中に、秋はいつか廬州城
を訪れていた。しかも季節の変化は、たった三日、私が熱
にうかされているまに起ったように思われる。

熱のため私の感覚が鋭くなったためか、或はその三日間、
雨が降りつづいたためかも知れない。

私ははじめてマラリヤにかかった。二、三日身体がだる
く、午後になると足を動かすのもつらいが、ただの疲れと
思っていた。寝ればなおると早目に横になり、朝はいくら
か気分がよいのに、星飯がすむと全身がしびれたように重
くなる。腹立たしく、悲しく、何度も自分をはげますのに、
ポンプを押す力さえ抜けていく。遠い民家の病室にたどり
つき、患者たちの寝ている片隅で眼ががすみ、寒気がひど
くなる。しまいには眼をつぶってその場にしゃがみ込んだ。
楊さんにたすけられて部屋にもどり、毛布にくるまると、
一時に全身もえ上るような熱を感じた。

私は熱にうかされながら、一晩中、奇妙な夢を見た。そ
の夢の中で、私は、色彩鮮明な何とも形容しがたいほど美
しい模様の中にいるのであった。その絢爛たる光景、その

夢の絨毯模様の真中に私は寝ていた。寝ているということ
が夢の中でもよく意識された。私をとりまく模様は、黒地
に金、赤、緑の点を散らしたもので、その点の一つ一つが
輝く砂のように見え、しかも輝きながら運動していた。夜
光虫が波まにきらめく感じだな、と私は考えた。そのうち
私は自分が何か発見したらしいと気づいた。何を発見した
のかしら。これは大切なことだから、よくよく考え、気を
おちつけてまともあげなければならぬ。夢の中で私は思
いついたように周囲を見まわす。もとより周囲には闇黒の
布に燦然と輝く点の群しかありはしない。私はもう一度眼
をひらいてそのベルシャ絨毯の模様を見なおした。徐々に
ゆっくりと、私にはその点の群が細菌にちがいないことが
判明した。無数に美しい菌、コレラ菌もまじっている。

私は平安な心で、この大発見を味わった。驚きは起らず、
何か自然と安心ができた。そうだ。アラビアの王女になっ
たのかな。それだからこそ、こんな美しい菌模様の絨毯の
上に楽々とねそべっていられるのであらう。もう、この上
に寝たからには病気は病気、熱は熱、みなそのままでいい
のらしい。何て良いいきもちでいられることかしら。痛まし
いこともなく、おびやかすものもなく、楽園に遊ぶここに
で、そのまま私は夢の中の睡りに入った。

夢がさめてもその三日間、私には夢中の楽しい気分が残

っていた。美しい平安なものが不思議に強く、淋しくも苦
しくもない。そんな夜半、フト眼をさますと枕もとに楊さ
んと医官が顔をそろえていることがあった。私は心配そう
な二人の顔を、むしろあわれむように見やう。そして一
人ずつでなく、二人がそうして一緒に私をのぞきこんでい
ることが可愛らしく想えた。

その時の医官は少年のように気やすかった。あのきびし
い医官までが。

三日目の朝、四時頃、私は眼をさました。寢床を下りて
裏の炊事場を眺めると、そこではもうカッカと釜の火を
焚いていた。焰や火花の光で炊事係の顔は赤鬼のように凄
い。その炊事場のあたりは水を使うため、いつも黒く地面
がぬれているが、今日はそこばかりでなく私どもの部屋の
下までぬれていた。

「そうだ、雨が降ったんだっけな」

私は夢うつつに聴いた雨の音を想い出した。雨は校舎の
灰色の屋根や白い壁にしみ込むように静かに降っていたの
だった。私はこの三日間、院子の中のアカシアと芭蕉の葉
が、時々夜の雨を払い落すように音たててのに聴き入った。
「アカシアの葉が落ちるわ」私はぶらさげたテントを吹い
て窓から入る雨の滴を顔に感じながら、枕に向ってひとり
そうつぶやいていた。

「うんと働かなくちゃ」三日分の働きをとりもどそうと私は狭い部屋を出た。まず病棟を通り抜け、病院の正門まで歩いてみた。雨のあと、埃はすっかりおさまり、広い庭全体が清らかに甦って見えた。花壇に花は少いの、芝生の色は美しく、低いバラの植えこみも今日は艶よく生き生きしている。何より目だつのは百日草の花。この学校の生徒たちが園芸で植えておいたのかもしれない。今までは枯れた、ひょろひょろした茎にみじめな花をつけて立っていた。おまけに石灰粉末のおかげで、一層色がわるく、貧弱だったのに。それが今朝はすっかり見ちがえて、痩せているのさえ秋らしく、少し葉をふるわせて立っている。あんなにかつい百日草でも、やさしく見える時があるのかしら、と私は感じた。

私は庭を三方からとりまく建物を見なおした。白い壁に黒い瓦屋根を置いた簡単な一階建ての建物。生地の煉瓦壁にチョコンと入った木組の窓、そんないかにも稚拙な支那風建物は、もうまとまり良く秋景色の中にあつた。その周囲に植えられたアカシアが朝の風に吹かれ、ハハリハハリと枯れた葉を落す。それが雨のあとの静かな風で、ひとりでに落ちる軽い葉なので、こんな病院の奥にひそむ秋の動きの微妙さがよくわかった。

「廬州はやはり良かったのだ。いやなのは夏だけだったの

だ」

私は正門の前の黒々とした泥土をふんでみた。久しぶりに黒くなった土は親しげに私の靴にねばりついた。

「お早う」どこからもらったのか魚の籠をさげた楊さんが、いそぎ足に來た。かなりの距離を走ったのか顔が赤く上気していた。

「こんなところで何してるの。早く部屋へ帰って寝てなさい。ほんとに困ったひとね」という風に、楊さんは私の手をひっぱった。私が今どんな心持で泥を踏んでいるのか、アカシアや草花を眺めているのか、楊さんにわかったらなと私は思った。しかしそれはむずかしい。野性にみちた楊さんの強い感情からすれば、私の好みなどはとりとめもない、うすぽんやりした物思いなのだから。そうだ。私はもう青春の乙女ではなく、こんな場所で、つまらぬ自然とか建物に心をひかされたりして、楊さんたちの持つ女らしい、あたりまえの生き生きした日常がすっかりなくなってしまうのだから。

門前を五十ぐらいの女が、わずかな薪をかかえて歩いて行く。纏足した小さな足はのろのろとしか運べない。白髪のみじった頭をうなだれ、疲れをこらえて行く。「チヨッチョ」和杨さんは舌打ちした。何物かを憎む如き、はげしい感情がキラキラ光る眼にあらわれていた。